

細江カトリック教会だより

8・9月号

〒750-0016 下関市細江町1-9-15

☎083-222-2294

☎083-222-0970

ホームページ <http://hosoechurch.sakura.ne.jp>皆さんにとって、
祈る場はどこでしょうか

今日は主の変容の主日です。マタイ福音書は、イエスが三人の弟子を連れて、山に登り、そこで弟子たちの前で姿を変えろという場面を語っています。

山という場所は聖書では、神に出会う場、あるいは祈る場です。モーセはイスラエルの民のために神に会おうとするときに山によく登りました。イエスも祈るときに、山によく登りました。山上の説教とか、十二使徒を選ぶ前にイエスが山に行き、夜を明かして神に祈ったということを皆さんは覚えておられるでしょう。

山は、神に祈る場というシンボルです。皆さんにとって、祈る場はどこでしょうか。ここですか。教会ですか。確かにそれはそうです。教会は祈る場です。ただし、もう一つの場所を祈る場とする必要があります。それはどこでしょう。それは家族だと思えます。家庭の中では、祈る場として私たちの信仰の基礎が養われています。皆さんはうちで聖書を読みますか、祈りますか。家族のお父さん、お母さん、娘さん、息子さんは一緒に家庭の中で祈ったことがありますか。ある家庭は皆同じ信仰ではありませんから、一緒に祈るのは難しいかもしれません。

しかし、祈る雰囲気を作って頂ければ、家族が変わると思えます。イエスの変容のように、家庭の生活の中で、たと

えどんな困難があっても、祈る場では自分自身を見だし、主の声をよく聴き取り、お互いに理解し合うことができるからです。

今日の福音書は、また三人の弟子たちは素晴らしい経験を体験すると述べています。ペトロはイエスの変容を見ると、口をはさんでイエスに言いました。「主よ、私たちがここにいるのは、素晴らしいことです」。そして、弟子たちはこの栄光の中に留まりたがっています。丁度その時に、彼らは天から神の声を聞きました。「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者。これに聞け。」イエスに聞きなさい、イエスに従いなさいという神の招きです。イエスの変容の物語によって、神はイエスの復活の栄光、イエスのアイデンティティを私たち

に示してくださいました。それで、私たちは偉大な希望を与えられています。

これから、イエスに恐れずに従うということへと招かれています。イエスに従うのはイエスと共に十字架の道を歩み、イエスと共に栄光に入ることです。そういう意味で、まず弟子たちはイエスと共に、山を下りなければなりません。

祈る場での、神との出会いは「山を下り」、低いところに、平地に戻るよう私たちを促します。私たちはこの平地で、労苦・病気・無知・物質的・精神的な貧困にあえぐ多くの兄弟姉妹と出会います。私たちは、困難の中にあるこうした兄弟姉妹たちに対して、受けた恵みを



分かち合うことで、神と共に体験したこの実りを伝えるようにと招かれています。私たちがイエスの言葉を耳にし、これを聞いて心にイエスの言葉が成長するのがどのようにして分かるでしょう。それは他の人に与えることによってです。これこそがキリスト者の生活です。

イエスに聞き、イエスを他の人に伝えること・・・それは全教会の洗礼を受けたすべての人の私たち皆の使命です。この使命を果たすのは、先ず家族から出発するのです。祈る場として家族の中でイエスを伝え始めるということです。

主の変容の祝日によって、私たちもイエスのように変容ができるよう、先ず祈る場を作り、そこで神と出会う体験をし、イエスに聞き、そしてイエスに従い、他の人にイエスを伝えましょう。

丁度、今日は1945年8月6日午前8時15分、広島約14万人が亡くなったことを記念する日です。このことを思い出して、主の変容の祝日を祝いながら、家族の平和・日本の平和・世界の平和のために祈りましょう。

主の変容の祝日に・・・

ディン神父



地区だより IV

今年度は、当初よりコロナ禍と集中豪雨などで、多くの人たちが様々な被害をこうむりました。普通である事がいかにありがたいか、今身に沁みて感じています。

不幸はすぐにわかるが幸福は過ぎ去ってから悟る、と聞いたことがあります。科学と文明の進歩により、医療や生活のあらゆる面で、私たちはたくさんの恩恵を受けていますが、一方で地球温暖化や核の問題など、一朝一夕には

解決のつかないリスクにも直面しています。

それでもキリスト者としては、祈ることによって神の声を聞き、物理的には無理な隣人への働きかけも、私たちの祈りによって、主の呼びかけを福音的に証しすることができるのではないかと、この非常時にあたって「信じて祈れ」というみ言葉が、私の心に強く響いて参りました。

万事に役立たずの私ですが、神父様はじめ共同体の皆さまからいつも温かいお心遣いをいただき、近頃自分は、生きているのではなく、生かされているのだと、実感するようになりました。現在はまだ“み旨のままに”の心境に程遠い私ですが、生かされている身として、ままならぬ事も受け入れて、只々切実に祈り、晩節を完うできたらと願っています。

感謝と祈りのうちに

山の田地区 森 正子

戦後75年を迎えて・・・



75年前の8月9日、私は爆心地から8.3キロ離れた西彼杵郡矢上村に疎開していました。父は出征していたので、祖母と母と妹弟6人の計8名で、牛小屋の2階を借りて住んでいました。

あの日、雲一つない夏の青空でした。空襲警報にならないうちに昼ご飯（米より豆類が多かった）を済まそうと言って、お釜の蓋を開けた時、向かい側の山がピカッと光って、生暖かい風が一瞬のうちに、障子が飛び仏壇から花や位牌が飛び出し、家の中は黄色い砂で

粉々になりました。庭にいた母は、熱風で身体が浮いて足が熱かったそうです。防空壕に避難する時、真っ青な空に真っ白な雲が黙然と広がっていき、長く尾が伸びていき、それが原子雲でした。何時間か過ぎて、壕を出ると一面灰色で、何かに抑えられるようでした。畑の蓮芋の葉に黒い雨が溜まって穴が空いていました。今もあの時の不吉な空気をはっきりと憶えています。

暫くして、近所の三人が敷布団を被って、風船爆弾が落ちてくると言いながら防空壕の方へ急いでいました。それは茶褐色の不気味な太陽でした。

夜になって、浦上の方の空は真っ赤で、塵みたいなものがチラチラ落ちてきました。

夜中に警報のサイレンが鳴った時、初めて恐怖で震えました。今まで警報のサイレンが鳴っても暫くすると警戒警報解除になり何事もなかったからです(疎開する前、長崎市内に居たときは焼夷弾がバリバリと降って来る中を、防空壕に避難し、ローソクの灯で弟のミルクを沸かしていました)。

翌朝、近所の人たちが「浦上の耶蘇がいっぱい死んだげな」と話していました。長崎市内の女学生だったお隣のつるえ姉さんは、学徒動員で兵器工場で被爆し、三日目に黒焦げになって帰ってきました。腕に真っ黒い布切れみたいなものが付いているだけでした。

三日目になり、もう一人は、学徒動員の工場で被爆し、顔中ケロイドになって、しばらくして自死されました。

国道は、負傷者を乗せた軍用トラックが大村の海軍病院に向かっていました。……これで、終わります。

被爆・終戦75年の今年、改めて平和の願いを込めて、私の体験を綴らせていただきました。

長府教会 桂 輝子



私共八十歳以上の人々は多感な幼年期に終戦を迎えております。現実には被爆を受けた場に居合わせず、あの様な体験をしておりませんが、それでも戦中の想いは決して忘れることは出来ず、“戦争を禁じる事”を後世の人に伝える義務を思うのです。防空壕に飛び込んだこと、充分の食糧の無かった戦後の「修学旅行」なるハイカラなこと、いつも大根、芋の入った弁当に少しのお米の入ったものを持った友人のこと、また学校で授業が始まったと思えば教科書のページを開き言われた場所から筆で文をつぶして見えなくする日。今までの教えは何であったのか、小さな心ながら納得のゆくものではありませんでした。母が大切にしていたドイツ版の楽譜を防空壕から取り出し、シミと破れのひどい楽譜は今も母の想いと共に、大切に保管しております。戦争で亡くした親族のいないことは幸いに思うのですが。今“核なき世界の実現のため”と教皇さまの『原子力の戦争目的の使用は倫理に反する』という言葉は、私たち年配の信者の心に深くしみ入るのです。戦後75年の年月を過ぎると「平和」「平和」と言うばかりの本当の意味、深い重みを感じながら少ない体験の私たちでも、後世の若い人々に平和の大切さ、ありがたさ、意味を伝えていきたいと思えます。

今はコロナという不安と共に生きています。人間の持つ悪を、ウイルスは裁くのでしょうか。神さまからの意味はなんのでしょうか。いろいろと思う夏を迎えました。

私たちが生かされているこの地球が健全であるように神さまに感謝しつつお願いいたします。

新地筋川地区 増井 文子

子どもミサ 7/23 (木)

敬老の日は・・・



ミサに与る席は、人との距離を確保し、密を避けるために座れる人数が70人程度に変わっています。まだ、しばらくはこのような状況が続くでしょう。

感染症対策のために、間隔を空けてミサに与ることが親も子も落ち着かないのではないかと考え、海の日の日休に子どもミサを行うことになりました。

何家族来てもらえるのだらうと不安でしたが、神父さまが彦島教会の子どもたちも誘ってくださっていました。

ディン神父さまがギターを、作道神父さまが種をまく人の絵を示し「種は神さまのみことば、そのまかれて落ちたところに私たちの心がある。」とお話してくださいました。

ミサ後はホールで家族ごとに紹介し、細江も彦島も教会にこだわらず一緒に集まる機会を作っていこうと約束しました。

子どもミサには初聖体の案内を配る目的もありました。要理タイプのカテキスタの出発は初聖体の勉強の機会がもてなかった子どもに個別に接して導くというものでした。このような状況になるとは思いもしませんでした。個別に時間を調節しながら進めていくつもりです。

洗礼を受けた子どもたちがご聖体拝領ができるように、教会共同体は一緒に祈り、待っています。

今までに、初聖体クラスを担当されたシスター方や帰天された細川シスターの遺志を継いで聖霊の助けを願い、子どもたちと共に頑張っていこうと思っています。

林 恵子

「青年は美しい、
しかし、老人はもっと美しい」
(フランスの哲学者ティボン)

病弱であった自分が81歳まで生かしていただけて幸せです。自分で運転もでき、ミサに与れるなんて、神様のお恵みに感謝しかありません。後続車からは急かされますが、お先へどうぞです。平素の運動不足もあり、足、腰、頭の衰えはひどいものです。猛暑の日々、夕方からの庭木の手入れを楽しみにしています。いろいろとお世話になります。

北部地区 菊野

† シスター マリア・アグネス 細川祥子さまの帰天によせて



今年4月から癌治療のために広島の病院に入院。その後、神戸の援助会六甲修道院近くの病院に転院し治療、「緩和ケアに入る前に六甲修道院に一度帰りたい。」と本人が希望された修道院で静かに、平和な時を過ごされました。

7月27日 お仲間の皆さまに見守られながら、許され、癒され、祈りに包まれた最期を迎えられました。

シスター細川は・・・

2017年から今年はじめまで、下関細江教会で、受洗希望者や初聖体の子どもたちのご指導を中心に、献身されました。

シスターの生涯を、慈しみに満ちた神様が受け入れ、豊かにお報いくださるよう心からお祈りいたします。

感謝を込めて・・・

*10/4(日) シスター細川が受洗指導をされていた吉廣さんの洗礼式とシスターの追悼を行います。